

第 59 回加藤周一文庫公開講読会「『続 羊の歌』を読む」

——第十三章「海峡の彼方・後半」——

立命館大学博士後期課程

堀内 智吉

★前章の補足

○「バラ色の崖」は朝か夕方か⇒「ロンドンの印象」（『加藤周一世界漫遊記』）、運行時間、カモメ

○「信州旅日記」⇒『自選集 2』に収録

○バルトークについて

そういう[本居宣長の]ことを考えていたときに、私はまたハンガリーの作曲家バルトークについての実に興味深い本を読んだ。伊東宏『バルトークー民謡を「発見」した辺境の作曲家』（中公新書、一九九七年）。第七回吉田秀和賞受賞作品である。伊東氏によれば、バルトークは、ハンガリーの「ナショナリズム」の昂揚のなかで、中欧の、殊にハンガリー農民の民謡の収集と分類に着手した。その目的は、「音楽における「ハンガリー的」なるもの」の探求である（同書、一〇六頁）。宣長風にいえば、音楽的「国学」であり、「西欧心」を排して、「ハンガリー心」の称揚ということになる。（『自選集 9』「宣長とバルトーク」）

【※下宿の人々について】

| 下宿関係者 (名称は「羊の歌」準拠) | 詳細な記述の有無 | |
|-----------------------|------------------|-------------------|
| | 羊の歌 | イギリスと私自身 |
| 下宿の主人 | × | ○ |
| 下宿の世話人 | × | ○ |
| インドの勤人 | ○ (ヴィーンの女が登場) | × |
| セイロンの男 | ○ | ○ |
| アフリカの黒人 | × | ○ |
| ドイツ人の男女 | × | ○ (女性のみ⇒ヒルダか?) |
| フランスの女子学生 | ○ | ○ |
| 英国人の中年女性 | × | × |
| 高雅なインド人 | × | ○ (ビルマ人と表記) |

第六段落 大英帝国の「知的な侘び」

ノーマン氏の日・仏語は、流暢ではなかった。私の英語は幼稚であった。しかしその三つの言葉のどれでも私たちは意を通じることができた。「あなたは《アビング・ハーヴェスト》を読むとよい、きっと好きになりますよ」——たしかに私は好きになり、手に入るかぎりのE・M・フォースタを読むようになった。そればかりでなく、私はまたいわゆるブルームスベリの諸家とジョン・オーブリの散文の妙趣を、ノーマン氏から教わったが、そこには、たしかにフランス語の文学とはちがう別の世界が^{ひら}展開していた。その世界を定義することはむずかしかったし、今でもむずかしい。しかし私のなかにもし英国の文化に対する一種の親愛感があるとするれば、それは彼らの散文の——何というべきか、おそらく「知的な侘び」とでも名づけたい一種の性質と関係しているにちがいないと思う。「侘び」の真髄は、「南坊録」もいうように、金殿玉楼の華麗を避けて、浦の苦屋の質素に美の極致を見ることであろう。今ある種の英国人が、その著書に題して、大上段には構えず、あるいは《アビング・ハーヴェスト》といい、あるいは《ザ・コモン・リーダー》という、その趣向を私は好むのである。現にノーマン氏その人にも似たところがあって、知的洗練の微妙さに、話相手の感情に対するおどろくべき敏感さが加わっていた。

(1) イギリス文学者

OE・M・フォースタ

イギリスの小説家。主な作品に『ハワーズ・エンド』、『インドへの道』などがある。異なる価値観をもつ者同士が接触することで引き起こされる出来事について描いた作品が多い。フォースタは、「個人主義的なヒューマニズムが現代ヨーロッパの知識人の大多数に典型的な考え方」であることを、「もっとも典型的な表現」で示した人物であると評されている(著作集 2/p. 280)。加藤によれば、「およそ一人の外国の作家をフォースターの場合ほど身近に感じたことは一度もないといわなければならない。(著作集 2/p. 282)」

○《アビング・ハーヴェスト》

原題は「*Abinger Harvest*」。E・M・フォースターの随筆。この本を読むきっかけとしては次のように記されている。「私はあるときリットン・ストレーチーに対する私の讃歎とプリッチェットの文章に対する好みを〔ノーマン〕氏に打ち明けたことがある。するとノーマン氏は、即座に、それならば『アビング・ハーヴェスト』を読んでみ給え、(…)」(著作集 2/p. 281)」

○ブルームスベリの諸家

1905年から第二次世界大戦期まで存在し続けたイギリスの芸術家や学者からなる組織である。E・M・フォースターもその一員であり、他には経済学者のジョン・メイナード・ケインズや小説家のヴァージニア・ウルフなども参加していた。

「彼らのなかには、古典的教養と理性的な人間への信頼、鋭敏な感受性とイギリス人が「ユーモア」とよぶ知的能力、また殊に自分自身とその文化を相対化することのできる寛容で開かれた精神があ

った。(著作集 15/p. 274)」

○《ザ・コモン・リーダー》

原題は「*The Common Reader*」。ヴァージニア・ウルフが1925年に発表したエッセイ集であり、専門的な批評家ではない「普通の読者 (common reader)」の視点から文学を楽しむことの意義を探求する著作。

○ジョン・オーブリの散文

イングランドの好古家、作家。『名士小伝』という伝記短編集の作者として有名。同書では、オーブリの見聞きした様々なゴシップが、彼の正直な感想と共に記されている。

【※加藤の英国小説家評】

要するに私が主としてよむのは、平易明快な英国の散文家である。しかもその数は少ない。しかし私の知る限りでは、彼らがそのいおうとすることを、できるだけ正確に、できるだけ単純な形で、表現するのに熱心なように思われる。そのいおうとする所は、あるときには、痛烈極まる諷刺（たとえばスウィフト）であり、あるときには情念の質（たとえば「嵐ヶ丘」）であり、あるときには知的ディタッチメントから生まれる微妙なヒューモア（たとえばE・M・フォースター）である。しかしそのいずれの場合にも、言葉は正確に的を射る。まわり道や、装飾や、事実を離れてとめどなく発展する連想というようなものがない。おそらく程度の問題であろうけれど、今かりにこれを平易明快とよぶとすれば、この種の平易明快は、私には英国の散文家においてもっとも確かな伝統をつくっているように思われる（フランス語の散文には、建築に似た面がある。文章が、何事かをいうためだけではなく、それ自身の構造の均斉のために、つくられるという面がある）。（加藤周一世界漫遊記 / p. 250）

(2) 「知的な侘び」

○「南方録」

筑紫国の立花家に千利休の秘伝書として伝わった古伝書。ただし、同時代を著した書籍としては内容や用語等に矛盾点が指摘され、現在、研究者の間では元禄時代に成立した偽書として認知されている。かつては、「わび茶」の概念の形成に大きな影響を与えたと考えられてきたが、現在では実際の成立年代である、江戸期の茶道における利休回帰を裏付ける資料として捉えられている。

○「侘びの神髄」

ここで加藤は南方録をもとに、「金殿玉楼の華麗を避けて、浦の苫屋の質素に美の極致を見ること」と書いている。南方録の「覚書 三十三」では、侘びという美意識を初めて展開した武野紹鷗と、それを発展させた千利休の見解が記されている。紹鷗が「華やかさ」と「侘しさ」を、具体的な物体の様子に基づいて区別したのに対し、利休はその両方を美しいものとして感じ取る心の在り方に侘び

の精神を見出した(南方録 pp. 93-97)。字面だけを見ると加藤は紹鷗の見解を参考にしているように思われる。もしそうであるならば、加藤が「知的な佻び」と呼ぶ振る舞いも、ただ知識を持っていることに驕って、上から目線になることではなく、確かな知識の積み重ねの極致として、些細な「知の揺らぎ」を看取するような所作を指すのであろう。一方で、利休を念頭に置いていたのであれば、古今の文化に敬意を払いつつ知識を積み重ねていき、素晴らしいものには公平かつ正当な評価を下せる姿勢を「知的な佻び」と呼んだのかもしれない。いずれにせよ、「知的洗練の微妙さに、話相手の感情に対するおどろくべき敏感さが加わっていた」という加藤の感想は両方のニュアンスで受け取ることができるだろう。

【※参考】

なぜ英国人が非ヨーロッパ社会に接したとき、自身の仕事の範疇を超えてまで、それらへの探求をするのかという「微妙な問題」への回答として加藤は、英国人には「人種と階級とを超えた人間世界全体への関心と、しばしば小さな個別的な事実への、殊にその複雑な「ニュアンス」への愛情が、その人格のなかに微妙に統一されていた(著作集 15/pp. 276-277)」からだと述べている。

第七段落 ノーマン氏との思い出——最後の会話

私が最後にノーマン氏に会ったのは、パリの街頭で、全く偶然の機会にであった。私たちは深夜の街頭で、長い立話をした。話はその頃米国で猖獗^{しょうけつ}を極めていたマッカーシー上院議員の《非米活動委員会》に及び、ノーマン氏は、そのとき、何故か、今でも私にはその理由がよくわからないけれども、彼自身をとりまく外務省内の微妙な関係を、人の名まえまで挙げて、語りはじめた。そればかりでなく、適当な機会に外務省を退き、カナダ太平洋岸の大学に去って、そこで日本史の研究に専心できたならよいだろうという意味のことさえも、半ば冗談のようにつけ加えた。その話は、しばらく会わなかった私たちの間のこととして、また深夜の街の立話としても、かなり唐突の印象を免れなかった。その謎めいた印象は、その後ながく私のなかに残った。しかしノーマン氏は大学へは退かず、外交官の仕事をつづけながら、カイロで死んだ。私はそのとき、後日、私自身が、その太平洋岸の大学へ退いて閑暇を愉しむことになろうとは、夢想もしていなかったのである。

○マッカーシー上院議員の《非米活動委員会》

アメリカの共和党議員であったジョセフ・マッカーシー、およびアメリカ合衆国下院に存在した「非米活動調査委員会 (House Un-American Activities Committee)」のこと。マッカーシーは、1950年代初頭に「赤狩り」と呼ばれる共産主義者への過剰な追及運動を行った。また、「非米活動調査委員会」も20世紀中頃、特に冷戦初期に、アメリカ国内の「共産主義的」・「反米的」思想や活動を調査・追及した。

【※参考】

○マッカーシズム

1950年代にアメリカ合衆国で発生した反共産主義に基づく社会運動、政治的運動。アメリカ合衆国上院（共和党）議員のジョセフ・マッカーシーによる告発をきっかけに「共産主義者である」との批判を受けたアメリカ合衆国連邦政府職員、メディアやアメリカ映画の関係者などが攻撃された。

○「その謎めいた印象は、その後ながく私のなかに残った」

上述の「赤狩り」の影響を受けて、ノーマンは自死している。この「最後の会話」の場面からは、何らかの危機を感じていたノーマンの焦りが加藤にも伝わっているように思われる。

○「カナダ太平洋岸の大学」、「その太平洋岸の大学へ退いて閑暇を愉しむ」

ブリティッシュコロンビア大学のこと。加藤は、1960年10月に同大学准教授として着任し、1969年まで日本文化史を講じる。この10年間を加藤は「蓄積の時代」と呼んでいる。

第八段落 ロンドンの安下宿

英国へ上陸した私の囊中は甚だ乏しかったので、安い下宿屋を探すのに苦労してようやく、アールズ・コートに一軒をみつけた。朝食と夕食つきで週毎に支払うしくみであったが、食事の時間は決っていて、一分でも後れると、食堂の扉をしめて中へ入れなかった。部屋は小さくて、一脚の椅子と卓子、鉄製の寝台を一つ置くと、その他に空いたところはほとんどなかった。寝台は、パリのどんな安旅館にも見出し難い独特のものであり、床から高く、身動きのできないほど幅がせまくて、しかも念の入ったことに、真中が高く盛りあがり、蒲鉾形にできていた。その上で眠っても、転げ落ちなければ、その方が不思議だろう。小さなガス暖炉がおいてあり、小銭一シリングを入れると、決った時間だけガスが出る。時間が来れば、自然に消える。真夜中に消えて、手もとに一シリングがなければ、ひどい寒さに堪える他はなかった。六ペンスで半分の時間というわけにはゆかない。私が英国の一シリングとフランスの一フランの、目方はちがうが、大きさと厚さの全く等しいことを発見したのは、そのときである（一シリングは五円、一フランは八〇銭であったから、それは経済的な解決法でもあった）。私の懐中にはフランスの小銭が沢山残っていた。

○アールズ・コート

アールズ・コート（Earls Court）は、イギリスの首都ロンドンのケンジントン・アンド・チェルシー区に属する地区。チャリング・クロスの南西3.1マイルほどの地域。1827年のロンドン付近の地図にはアールズ・コート・ファームとの文字が書き込まれており、この地域はかつてアール（＝伯爵の意）の荘園であったことが名前の由来。第二次世界大戦後にはオーストラリアやニュージーランドからの移民がこの地区に多く住んだ。現在は学生なども多く住んでいる。旅行者たちの間では安いホテルが集まる地区として知られている。



○「私が英国の1シリングとフランスの1フランの、目方はちがうが、大きさと厚さの全く等しいことを発見したのはそのときである」

以下、「文鉄・お札とコインの資料館」より抜粋。(なお、10円玉の大きさは23.5mm)

1シリング硬貨

おもて



| | |
|-----|-----------------------|
| 発行 | 1949/--/--~1951/--/-- |
| 大きさ | 23.60 mm |
| 刻み | あり |
| 形状 | 円形 |
| 重さ | 5.66 g |
| 素材 | 組成非公開 |
| 有無効 | 無効 |
| 表図柄 | ジョージ6世 |
| 裏図柄 | イングランド紋章 |

1フラン硬貨

おもて



うら



| | |
|-----|-----------------------|
| 発行 | 1960/--/--~2001/12/31 |
| 大きさ | 24 mm |
| 刻み | あり |
| 形状 | 円形 |
| 重さ | 6.0 g |
| 素材 | ニッケル 100% |
| 有無効 | 無効 |
| 表図柄 | 種まく人 |
| 裏図柄 | 自由・平等・博愛、オリーブ、額面 |

うら



第九段落 下宿の人々

下宿屋には、各国の人間が集っていて、人種の展覧会のようにみえた。主人は中部ヨーロッパの出で、部屋の世話をしていた女は、アイルランド人であった。下宿人のなかには、インドから来た若い勤人、何もしていないセイロンの男、アフリカのどこかの国の黒人、ドイツ人の男女、フランスの女学生、働いている英国人の中年の女、何をしているのか誰にもわからぬ——というのは英語を全く解しなかったからだ。高雅な顔をしたインド人らしい青年もいた。セイロンの男は、象牙でつくった大小の象を沢山もっていて、それを誰にでも売りつけながら暮していた。あるとき彼は私をつかまえると、大真面目な顔をして、おもしろい話があるといい出した。「象ならば買えませんよ」と私は応じた。いや、象を買ってくれということではない、と彼は弁明し、しかじかの劇場の踊子が一晩小さな象一つの値段でもものになるということがわかったのだ、と声をはずませて囁いた。「ああ、そうですか、それはよかった、しかしあなたの踊子のために、私は象を買いませんよ」「象は主人が買ってくれたから大丈夫です。しかし安いですねえ……」と行って、彼はいつまでも興奮していた。フランスの女学生は、留学ではなくて、仕事を探していた——と少なくとも本人はいつまでもいっていた。いつも午前中に電話がかかって来て、一日出かけていることが多かった。

○「下宿屋には、各国の人間が集っていて、人種の展らん会のようにみえた」

ここで加藤が列挙している人物は全部で8名いる。本文で詳細が記述されている、「セイロンの男」「フランスの女学生」「インドから来た若い勤人」以外の数名については「イギリスと私自身」(以下、「私自身」と表記)で詳細が語られている。以下では、その詳細を記述の差異も含めて紹介する。

●下宿の主人と世話人

私はアールスコートの下宿に住んでいたが、そこには下宿屋の亭主のほかに豊かな人間は一人もいなかった。亭主はチェコ人で、食事の給仕をしたり部屋を片づけたりするのは、アイルランド人の娘だった。[...]アイルランドの娘も、ロンドンの生活をたえずこぼしていた。暗い、おそろしい都会で、落ち着けないところだという。「それならアイルランドへ帰ったほうがいいではないか」と私はいった。「ああ、それはだめ」と彼女は言下に応じた、「帰れば職がありません」。だから彼女は、チェコ人の下宿で、昼夜をおかず働いていたのである。(著作集 10 / pp. 339-340)

●アフリカのどこかの黒人

アールスコートの下宿で、いちばん快活で、好奇心が強かったのは、黒人の青年画家である。彼はある日突然、「これからパリに行くつもりだが、実存主義とは何だか教えてくれ。どうもパリで、はやっているらしい」といったものである。その場の思いつきで、私は一席実存主義を講釈した。「なるほど、これですっかりわかった」と、彼は感にたえたようにいった。「そんなはずはない、こっちにもすっかりわかっていないのだから」と、私は答えた。彼はその後パリで暮し、容易に国へ帰ろうとしなくなった。パリは大いに気に入ったらしい。しかしロンドンはあるいは少くともアールスコートの下宿は、格別気に入ったわけではなかったようである。(著作集 10 / p. 340)

・実存主義

人間の実存を哲学の中心におく思想的立場。合理主義・実証主義に対抗しておこり、20世紀、特に第二次大戦後に文学・芸術を含む思想運動として展開される。キルケゴール・ニーチェらに始まり、ヤスパース・ハイデッガー・サルトルらが代表者。

●フランスの女子学生

話がいちばん簡単に通じたのは、フランス人の娘である。彼女は強いなまりのある英語をとにかく流暢に話した。ロンドンは、おもしろいところだといい、いろいろの職があるが、何も急ぐことはないから、ゆっくり遊ぶつもりだといっていた。私とときどき近所の貸コートへ出かけてテニスをした。ある日隣のコートでは、老人がまた別の娘に打球を教えていた。それはのんきな親

子の遊びのように見えた。ところがその白髪の老人は、しばらく私たちのほうをうかがっていた後、にわかに怒気を含んで、近づくと、「このコートで教えるのは、私だけになっているということを知っているか」といった。どうもおかしい。「なぜいけないのか……」と私は相手の意図をはかりかねて口ごもった。「あなたは商売人だろう」と老人はいった。私はふき出し、「商売人にしては少し藝が下手すぎるだろう」と答えた。私の頭にあるテニスの商売人といえば、元デ杯選手の佐藤俵太郎氏くらいだったからである。それでも老人はなかなか納得しなかった。しかしどうやら私が私の相手から金をとっていないということを承知すると、私と勝負をしようといひ出した。「金はいらぬ」と彼はいった。そこで私はイギリスでただ一度だけ職業選手と勝負することになったのである。私はゲームをとった。しかしどうしてもセットをとることはできなかった。見物していたフランス人の娘は、勝負のあとで、「あなたが勝てそうだったのにね」といった。「それは君にテニスというものがわかっていないからだ」と私は答えた。(著作集 10 / pp. 341-342)

・元デ杯選手の佐藤俵太郎氏

佐藤俵太郎は昭和初期を代表する日本のテニス選手。1930年と1931年にデビスカップ日本代表として欧州遠征に参加し、フランス選手権やウィンブルドンで活躍。特に1931年には世界ランキング9位に選ばれるなど国際的な実績を残した。後年は指導者に転向し、テニス普及にも尽力した。

【加藤とテニス】

彼のテニスの技術は相当のものであったし、それにファイトマンであったように当時私には映った。ロビングでねばりぬく精神を持っていたようである。テニスだけでなく、校内対抗サッカー大会で、ボールをキープする彼の姿に執念を感じたこともあった。彼の家招かれた折、よくオークションブリッジを行ったが、勝負という時には、強さを発揮したように思う。勝負ごとにおいては、必勝は信念だけで達せられるものではなく、技術を伴うものであるが、彼は彼の技術なりに、ファイトを燃やす面があった。(月報集 3 / p. 7)

●高雅な顔をしたインド人らしい青年

下宿人のなかで、いちばん高貴な顔だちをして、だれにも静かな友好的な態度で接していたのはビルマ人である。しかし彼が何ものであるかは、だれにもわかりようがなかった。一言も英語を解しなかったからである。しかし彼は毎朝一定の時間に下宿を出かけて、夕方早く一定の時間に帰ってきた。(著作集 10 / p. 341)

※「私自身」では、インド人ではなくビルマ人と表記されている。

●セイロンの男

その[下宿人たちの]なかで資産のいちばん豊かだったのは、セイロンの青年だったかもしれない。彼はその大小の象を売って暮らしているのだといい、国へ行けばもっとたくさんあるのだといった。ある晩、彼は私の部屋へやって来ると、興奮して「きょうは大きな発見をしました」といった。それは、小さな象一つの値段で、しかしかのレビューの踊り子と一晚過せるらしいという話である。「なるほど、それで小さな象を一つくれますか」と、その話をきいて私はいった。「いや、なかなか買い手がない、あなたが一つ買わないかと思って来てみたが……」と、彼はおどおどしながら半ば口のなかでいった。「冗談じゃない」と私は叫んだ、「仏さまもいったように、死んだ象よりも生きた踊り子のほうがよい。ぼくに興味があるのは、踊り子で、象じゃない」。「仏陀がそんなことをいったらうか……」とセイロンの青年は真顔でつぶやいていた。(『著作集10』 / pp. 339-340)

※「海峡の彼方」と「私自身」では設定、会話の内容などが少し違う。セイロンの男が作っている象の像は、「海峡の彼方」では象牙製だが、「私自身」では黒檀製である。また、「海峡の彼方」では誰彼構わず象を売り込むセイロンの男だが、「私自身」では買い手が見つからず加藤のもとを訪れている。なお、「死んだ象よりも生きた踊り子のほうがよい」というのは、旧約聖書の「生ける犬は死せる獅子に勝まさる」を加藤がアレンジしたものと思われる。

第十段落 インド人への忠告

下宿料さえ払えば、主人は夜の訪客にも文句をいわなかった。インド人の、働いているという男のところへは、週末の度に美女が訪ねてきた。私はインド人とも食堂で話すことがあったが、美女の方も知らないわけではなかった。そもそも私が英国へ出かけたのは、子供の頃より噂を聞くことの多かったその国を一度見たいという願いが理由ではなく、実はヴィーンの娘を忘れ難かったからである。彼女は職をロンドンにもとめてシティーの事務所で働いていた。インド人のところへ訪ねて来ていた金髪の美女は、彼女の同国人であり、二人の間には親交があったのである。私はやがて、インド人には金がなく、国に妻子があるということ、美女は国を出てから、富裕な英国人の家庭に住みこんで、家事の手伝いをしているが、その仕事は重く、外出の機会は少いということ、しかし英語に慣れるまでは他に職をもとめることはむずかしいだろうということなどを知った。彼女は外国の大都会に住んで知人も少なく、そのインド人との関係を断ち難く思っていたらしい。ある日夕食のあとで、インド人の方は、私に相談をもちかけてきた。結婚する気があるのかなのか、はっきりしてくれ、と娘がいい出した、どうしたものか、というのである。「それはできないだろう」と私がいうと、急に安心したような顔をして、「よく知りもしないのに、そんな約束はできない」といった。「それならそうといった方がよい」と私はいった、「それでお終いになるとしても、今のうちに手をひいた方がよいかもしれない。子供ができてからでは

おそいだろう」。この最後の文句は、よほど効いたらしい。インド人はまもなく下宿屋から姿を消して、どこかへ行ってしまった。

○インド人と訪問客の女

「海峡の彼方」におけるインドの勤人は、「私自身」で留学生へと変更されている。だが、それよりも注目すべきは、インド人を訪れた女性であろう。彼女はヒルダの知人であることが仄めかされている。しかし、ロンドンの証券会社で働くヒルダとは対照的に、この女性は英国人の屋敷で働いており、英語を話す能力がまだ未熟であることが語られている。一方で、「私自身」にはインド人を訪ねる女性が描かれていない代わりに、とあるドイツ人女性のことが描写されている。この女性は、英語も話せるし、ヒルダが「伯母」と呼ぶ人物によく似た同じ人物と親戚関係でもある。つまり、「海峡の彼方」では「ヒルダの知人」を登場させてから「ヒルダが伯母と呼ぶ人物」の話へと移るのであるが、「私自身」では「ヒルダと思しき人物」を下宿している人間の一人として描き、その後「伯母」の話へと移るのである。

アールスコートの下宿で、英語がいちばん流暢で、いちばん身なりのよかったのは、ドイツ人の女であった。私は彼女とあまり話をしなかった。しかし何度か彼女の遠縁だというオーストリアの老婦人をたずねたことがある。(著作集 10 / p. 342)

○インド人への忠告

「私自身」と比較すると、「海峡の彼方」に登場するインド人とドイツ人女性は、加藤とヒルダに重ねあわされているようにも思われる。自分の状況を第三者目線で捉えているのであろう。

第十一段落 ヴィーンの娘の「伯母」①

ヴィーンの娘の勤先は、小さな投資会社で、月給は安かった。私たちが街で会って、夕食の場所を探すのは、当時のパリやヴィーンのように、容易でなかった。うまそうな場所は高すぎたし、安い大衆食堂は、料理の味よりも、騒然とした雰囲気や到底おちついて話すことを許さなかった。彼女の借りていた部屋はせまく、私の下宿屋の部屋はそれ以上にせまかった。しかし彼女は、「伯母」と称んでいた遠縁の婦人を知っていた。その婦人は、ながい間、チェルシーの富豪の家で、料理人兼家政婦の仕事をしていて、独り者の主人公が留守のときには、自分の知り合いを、私まで含めて、しばしば裏口から招待した。その家の主人をほとんど崇拜していて、その日常の行状を、英語とドイツ語の混った奇妙な言葉で、こと細かに語り、讚美・感嘆しながら、その当人の留守の間にあり余る夕食を私たちにふるまった。住居はあまり大きくはなかったが、家具は時代もので、銀の食器や燭台があり、文芸復興期の大理石像や中世の木彫があった。書庫には古典文学と英国の詩文・歴史・旅行記の類の古い版本がならんでいた。居間のフランス窓からは、河岸

の立ちの間にテムズを上下する船の帆柱が見えた。主人公は毎年、かもしかの猟に、遠くピレネーやトルコの山々まで出かけていたらしい。

○遠縁の婦人

ヒルダの親戚と思しきこの人物は、勤め先である屋敷の主人の留守を預かっている時に、客を招いてもてなすということをしている。これだけであれば、気立てのいい女性ということになるが、彼女に対する加藤の評価は少し異なる。「私自身」では、「ロンドンに住むこと三〇年に及んで、彼女はただ一人のイギリス人[=主人のこと]しか知らなかったようである。しかもそれは、その人の一面にすぎなかったろう。彼女はおそろしく孤独だった。だからどこの馬の骨とも知れぬ一人の日本人に、彼女の世界のすべてを語ってやまなかったのかもしれない(著作集 10/p.343)」と述べており、どことなく憐みの視線を向けている。

第十二段落 ヴィーンの娘の「伯母」②

私は主人と一度も顔を合わせずに、その住居で、豪華な食事をし、ゆっくりと風呂に入り、時には一夜を過ごして、翌日の朝ひきあげた。朝のチェルシー河岸で、乗合自動車の来るのを待ちながら、私はよく《三文オペラ》の泥棒の歌をくちずさんだ。しかしもちろん、当の主人公は、彼の料理人が当人の留守の間に何をしていたかを、よく知っていたにちがいない。おそらく日本の会社が社員の月給を容易にあげない代りに、《ボーナス》を何ヵ月分も支払うことがあるように、心得た上で、その習慣を好都合な安全装置と考えていたのであろう。

○《三文オペラ》の泥棒の歌

『三文オペラ』(Die Dreigroschenoper)は、ベルトルト・ブレヒトの戯曲。クルト・ヴァイルが作曲を手がけた音楽劇であり、1928年8月31日にシッフバウアーダム劇場の開場に合わせて初演された。「泥棒の歌」とは、『三文オペラ』の劇中歌『メッキー・メッサーのモリタート (Die Moritat von Mackie Messer)』のこと。【⇒音源再生】

第十三段落 下宿探しと人種差別

アールス・コートの下宿屋は必ずしも私を満足させなかった。食事つきの小さな部屋に住む代りに、食事なしで、もう少し大きな部屋を間借りしても、費用に大きなちがいはなかろうと私は考えるようになった。その貸間探しは、成功しなかった。しかしそのために、私は英国の社会の一面を知るようになった。まず街で店頭にはり出してある貸間広告を見る。そのなかに値段・場所などの適当そうなものがあれば、近所の公衆電話から電話をかける。しかしその広告のおよそ四分の一には、《白人のみ》または《有色人種断ります》のただし書きがついていた。ただし書きのない家でも、電話をかけると、相手は外国訛りの英語を聞いて、国籍を尋ねる。《日本人》と答え

ると、電話をいきなり切られたり、部屋はたった今ふさがったという答えのかえって来ることもあった。パリで暮していたときに、私は、むろん、外国人であることを、ほとんど常に意識していた。しかし、《有色人種》であることを意識したことは少かったし、またフランス人からみて旧敵国人としての《日本人》を意識したこともほとんどなかった。しかしロンドンの貸間探しは、私に《有色人種》を思い出させ、英国の酔っぱらいは、敵国人としての《日本人》を私に思い出させた。「おまえは日本人か」と酔っぱらいはいった。「そうだ」「おれはマレイでひどいめにあった」「それは残念なことだ」というほか、こちらには挨拶のしようもない。そういうことが、私にとって不愉快でないことはなかった。しかし少くとも《有色人種》に関するかぎり、相手の偏見に怒りを感じたことは一度もない。怒るためには相手の時代後れが、滑稽にみえすぎたのであろう。白色と有色の区別を強調し、さらにその対立を強調することは、もはや有色人側にとって不利であるよりも、はるかに白人側にとって不利であろうと思われたからである。世界の人口の多くは有色人で、その有色人が世界歴史の過程のなかに登場した以上、少数者の側で対立を強調するほどばかげたことはない。

○《白人のみ》または《有色人種断ります》のただし書き

カラー・バー(colour bar)とも呼ばれるような、人種的排除の傾向が当時のイギリスにはあった。第二次大戦後、イギリスでは労働力獲得を目指した移民受け入れ政策が採られたものの、実態としては人種によって就労できる職に区別が設けられていた。同様のことが、施設や交通機関の利用に際しても行われており、加藤の直面した問題もそのような流れの一つであろう。

○人種差別の愚かさ

「海峡の彼方」前半部分では、アジアの文化に深い興味を示す知識人たちの様子が描かれていたのに対し、この段落ではそれとは真逆のイギリスで受けた「有色人種」に対する差別について描かれている。加藤はそれが「時代遅れ」で「滑稽」に見えたという。同じようなことは、「パリのフランス人」でも述べられていた。

日本はアジアの国で、日本人は有色人種で、今どき西洋に対する選然とした慣れをもっているとなれば時代錯誤だ。ヨーロッパには世界中から集まって来た黒人や黄色人が沢山いる。[...]彼らの十人と話して、たとえわずかでも西洋崇拜の気のある相手を一人みつけだすことはほとんど不可能だろう。[...]彼らの大部分は西洋に何かを学びに来ているのだ。[...]世の中全体の進み具合からいって、西洋崇拜は今やひどい時代錯誤となった。それが西洋人自身の優越感となってあらわれる場合には滑稽であり、西洋人以外の有色人種の劣等感となってあらわれる場合には卑屈で、不体裁で、悲惨である。(「パリのフランス人」『ある旅行者の思想』 / pp. 208-209)

「海峡の彼方」では、もはや少数者である白人が不毛な差別を煽ることがかえって彼らにとって不利に働くことが述べられている一方で、上記の引用では、有色人種がその差別を受け入れることの愚かさについて述べられている。

第十四段落 人種的偏見と価値観

しかし「人種的偏見」が、そういう考えだけで片づくとはかぎらない。現に私は欧州から日本へ帰り、百貨店の人形が西洋人に似せてつくってあるのをはじめて見たときに、一種の衝撃を感じた。洋服ばかりでなく和服を着せた人形の髪や眼でさえも、もはや日本の女のように黒くはなかった！それは、百貨店の客、つまり日本の女の圧倒的多数が、自分よりも西洋人の女の方を美しいと感じているということの証拠ではなかったろうか。私は一般に西洋人の女を日本人の女よりも美しいと思ったことはない。たしかに男の体格は西洋人の方が秀れていた。しかし私自身はそのことにあまり深い興味をもっていなかった。すでに早く、子供のときから、同胞男子の多くが自分よりも体格がよく、容姿もすぐれていることをみてとった私は、どうせ改善することのできない体格や容姿に関心を持ち、劣等感を養うよりも、体格や容姿に関心をもたぬ方が、精神衛生上有利であると考えようになっていた。ながい間にその考えは私の習となり、他人の脚が長くても短くても、私の感情がそのために動くということはなく、有色でも、白色でも私自身に関するかぎり、実はどっちでもよくなっていたのである。もし私に容姿への関心があり、日本人のなかではわが容姿が抜群であると信じていて、しかも西洋人とくらべてはそう信じるができなかったとしたら、私もまた西洋人の作りだした美的価値（または美の標準）を拒絶しようとしてめるか、西洋人を崇拜して髪の色を染め変えるほかなかったのかもしれない。しかしその点について、私は傍観者にすぎず、そもそも熱烈な関心をもつ暇がなかった。その他の点については——人種優劣の議論のほとんどすべては、要するに論者の知識の不足を示すにすぎない。しかし不幸は、知識の不足が、しばしば歴史を動かしてきたということである。

○百貨店の人形が西洋人に似せてつくってあるのをはじめて見た

↓日本における女児人形の変遷(以下、日本玩具博物館 HP より)



アメリカのタミーちゃん展示コーナー (昭和30年代後半)



リッキーちゃん展示コーナー (昭和40年代後半)



ジェニー展示風景 (昭和60年代-平成初期)

加藤が帰国した 1950 年代後半に日本で販売されていた人形は左図の「ミーちゃん」のように西洋人を模したものであった。それ以降も、「リカちゃん」や「ジェニー」といったシリーズで、西洋風の人形が製造されている。

【差別に対する加藤の見解】

ドイツはヨーロッパの中心に位置し、その国内には異人種が居住していたばかりでなく、国境を接して多くの異民族と交渉していた。しかも一八世紀啓蒙主義の影響を通しての、「人間」または「人類」の観念があり、ナチ権力にとっては、人類の下級カテゴリーとしての多くの人種のなかで、ドイツ民族が他の人種よりも優れていることを、生物学的に証明する必要があった。そのような条件は、極東の島国にはなかった。国内の異民族・異人種は少く、国境を超えての彼らとの接触も限られていた。普遍的な人間または包括的な人類の観念は、三〇年代の日本人の意識のなかでは影の薄いものにすぎなかった。世界は日本人を含めての多数の人種から成っているのではなく、日本人と非日本人とから成っている、という考え方からすれば、外国人は——彼らが国内に居ようと国外に居ようと——第一義的に、異人種ではなくて、日本人社会の《outsider》＝外人である。したがって人種間の優劣は、原則としては、問題にならない。(自選集 8 / p. 324)

●ヨーロッパと日本の差別の違い

加藤の指摘を端的に表現するならば、ヨーロッパの差別が「種属の差異」を強調する差別なのに対して、日本のそれは「社会の相違」を強調する差別である。この意味で、日本における差別は独特の雰囲気をもっている。実際、「日本国内に長く存在し、今なお十分に克服されていない被差別部落の人々に対する強い差別は、人種とは関係がない」。部族差別における差別側と被差別側は種族的差異が認められない同じ日本人である。また、「在日韓国人に対する差別も、主として明治以来の政治的文化的なもので、人種的なものではない」と言える。もしこれが、ヨーロッパ的差別であるならば、日本政府が「同化政策」をとったことの意味を理解することができない。「韓国人は異人種としてではなく、共同体の外の人間として、対象化され、差別され」ていたからこそ、政府は同化可能であると暗黙裡に考えていたのである。

●差別撤廃に向けて

差別を廃するには、どうすればよいか。第一に、反差別を目標とする政策を推進する必要がある。さらには少数意見の尊重を保証する制度を強化すべきだろう。[...] 第二に、価値の多元化が必要である。経済的効率だけが社会と人間を評価する尺度ではなく、多面的な文化的価値と人間の生活の質が同時に強く考慮されなければならない。[...] 第三に、外に対して閉鎖的な集団主義は、境界を超えて開かれ、内に対して大勢順応主義を強制する集団主義は、自律的な個人の自由を尊重する必要がある。(自選集 8 / pp. 327-329)

加藤の掲げる差別廃止に向けた3つの取り組みについて、もう少し詳細を確認しておく(自選集 8 / pp. 327-329)。第一の指摘に関して、加藤は「社会全体の態度は常に反差別を目標としなければならない」と述べている。差別を主張する少数集団の意見と、差別対象となる少数集団の意見が対立する際、社会は常に前者を退けるように働きかけなければならないのである。第二の指摘に関して、

「社会と人生にとって GNP は、そのある程度の水準が必要な条件ではあるが、窮極の目標ではない。そのことについての広い合意が、日本国内において期待される」と述べている。国家の経済成長に資するかどうかだけを、社会や人生の価値を決定する尺度とするのではなく、もっと多角的な視座を獲得できるように価値観の転換を引き起こさねばならない。そして、その先陣を日本が切るべきであると加藤は考えている。第三の指摘に関して、加藤は「普遍的な「人権」は、個人に備わるはずのもので、集団に備わるのではない。「人権」の思想は個人主義を前提として成りたち、集団主義からは出てこない」と述べている。「社会の差異」に基づく差別が日本で起きるのは、伝統的な集団主義が深く根を張っているからである。それを解消することなしに、「人権において平等な少数者、外人殊に外国人」という考えは成立しない。しかし、西洋ほど個人主義の浸透していない日本において、伝統的な集団主義から脱却することは容易なことではない。それに対して加藤は二つの提案をする。一つ目は、「人権の普遍性を一八世紀とそれ以後の西洋帝国主義の歴史の特殊性から引き離すこと」であり、二つ目は、「西洋からの輸入のくり返しではなく、日本の歴史のなかに、自律的な個人を発見し、伝統を否定する精神の伝統を、継承し、発展させること」である。この二つの過程を経ることで、「伝統を否定する日本の伝統を活性化」し、差別廃止へと日本は歩を進めることができるのである。

参考文献

- ・加藤周一
- (1955)『ある旅行者の思想』、角川書店。
- (1959)『加藤周一世界漫遊記』、毎日新聞社。
- (1968)『続・羊の歌』岩波書店。
- (1979)「E・M・フォースターとヒューマニズム」『加藤周一著作集 2』平凡社、pp. 278-301。
- (1979)「イギリスと私自身」『加藤周一著作集 10』平凡社、pp. 329-351。
- (1979)「E・H・ノーマン・その一面」『加藤周一著作集 15』平凡社、pp. 271-277。
- (2009)「宣長とバルトーク」『加藤周一自選集 9』、岩波書店。
- (2010)「差別の国際化」『加藤周一自選集 8』、岩波書店、pp. 323-330。
- ・橋本謙(1978)「高校時代の加藤周一」『加藤周一著作集 月報 3』、平凡社、pp. 7-8。
- ・熊倉功夫(2009)『現代語訳 南方録』、中央公論新社。
- ・「なつかしの人形～昭和時代の人形遊び～」 | 日本玩具博物館 (<https://japan-toy-museum.org/archives/exhibition/plan/%E3%80%8C%E3%81%AA%E3%81%A4%E3%81%8B%E3%81%97%E3%81%AE%E4%BA%BA%E5%BD%A2%EF%BD%9E%E6%98%AD%E5%92%8C%E6%99%82%E4%BB%A3%E3%81%AE%E4%BA%BA%E5%BD%A2%E9%81%8A%E3%81%B3%EF%BD%9E%E3%80%8D>)
- ・「海外通貨 < 文鉄・お札とコインの資料館」 (<https://www.buntetsu.net/mbc/fcc.html>)